

にわれわれは立っている。つまり反主意主義的方向においてさえ、行為主体の自律性を客観的に確定することが可能だということである。しかし、それでもなお、構造それ自体を構造化する人間の営為を問題とすれば、客観主義的方法論の帰結を新たな実践の理論に組みこむブルデューのような方向も、ポスト・デュルケムの理論的可能性の一つであろう。著者はそのことも十分知っておられるはず

である。

なお、主意主義という言葉を広義にとれば話は別だが、現象学的社会学やエスノメソドロジー（あるいは象徴的相互行為論も含めて）のような主観主義的方法論が、従来の行為理論にどのような挑戦を試みているかという一面も、理論的には無視できないであろう。

◆A 5判 282頁, 3800円
東京大学出版会

書 評

片岡徳雄編

『教科書の社会学的研究』

埼玉大学 石 戸 教 嗣

本書は広島大学のグループが5年の歳月をかけて精力的に行ってきた「教科書の社会学的研究」の集大成である。編者を中心に13人の執筆者が多角的な側面から、教科書への社会的被拘束性と教科書による社会的被拘束性を解明している。わが国に「カリキュラムの社会学」の理論動向が紹介されて以来、カリキュラムに関する経験的・事例的研究の必要性が指摘されてはいるものの、その蓄積は思うようには進んでいなかった。本書がその遅れを一挙に埋めるものとして現れたことの意味は大きい。

また、本書は、唐澤富太郎の『教科書の歴史』以来のこれまでのわが国の教科書研究の動向をも視野に入れて、単に「カリキュラムの社会学」の機械的移入・適用ではなく、わが国のこれからの教科書づくりにも現実的な方向づけを与える内容となっている。

本書のカバーする範囲の広がり、つぎのような構成からも知られる。Ⅰ モデルと人物、Ⅱ 人間の関係、Ⅲ 時間と空間、Ⅳ 科学と研究、Ⅴ メディアとして、Ⅵ 教育制度として。これら六部の領域が21の章から構成されている。

各章は一つのテーマにつき独立した考察をなし、それらが寄り集まって、教科書の全体像を浮かび上がらせている。章の多くは、データに語らせるという実証的姿勢を取りつつも、「1 序説的考察」、「2 教科書知識の社会学」、「17 儀礼的消費メディアの仮説」の章では、「新しい」教育社会学以降の理論の流れの中の研究の位置づけがなされており、また「21 教育内容とイデオロギー」では、教科書裁判に示されるような政治と学問の葛藤から教科書を救い出す上で、「自由な学習」への方向づけがなされ、全体をまとめている。

本書で量的に最も比重がかけられているのは実証的データに基づく考察であり、これらを通じて教科書が社会的拘束を受けつつ変化していることが改めて理解される。ここでは、多彩な知見が、時系列的・比較的手法によって、またそれを相互作用過程分析・クラスター分析・パーソナリティ分析・文体分析・回帰分析・内容分析などと絡み合わせながら提出されている。その手法の工夫のこらし方にも学ぶ点が大である。

本書の内容は多岐にわたり、しかも各

章が一つ一つ独立した結論を導いているため、各章の知見をひとまず概観しておく。

I, II, IIIで内容的に明らかになったことを列挙するならば、①伝記教材の非政治化、②戦後の教科書に描かれる人物像の母性原理化、③道徳教材のメッセージとしてのあいまいさ、④父母の地位の低落化、⑤女性軽視の傾向、⑥教材によって構成される時空間が「小さい世界の、今、ここに」に限定されていること、⑦欧米中心性、⑧諸外国との関係認識の甘さなどであり、これらを通じて現行教科書の持つ特質の全体像が自ずと浮かび上がってくる。

また、IVでは科学的知識に焦点を当て、知識項目の類型分析を通して算数教科書において、人間化の政策的意図とは逆に、専門的知識の比重が一貫して増大しているという興味深い知見が得られる。また、エポニミー分析から同様に、「人間不在」化が進行しているとされる。ここではさらに、「大学教科書」という未開拓の分野にも手が付けられ、そこでの内容面での合意性、標準性が低いという事実が示され、またその一因としてわが国の出版事情によるという説明がなされている。

Vでは、15, 16章において戦前期の国定教科書の文体や出典の特徴が明らかにされ、特に後者ではそれが戦前知識人の心情ルーツとなっている可能性が示唆される。17, 18章では、教科書の実際の使用の面から、その地位と機能が変動しつつあることが、特に儀礼的消費という視点から示される。

本書のこれらの論稿を通じて、教科書が制作者の意図を越えた潜在的次元を備えていることが説得力をもって語られる。潜在性の分析という意味で、本書の拠って立つ基盤は、2章で分類された基準を用いるならば構造主義的立場に近いと言えよう。が、それは単にヤングやバースタインの理論の適用というのではな

く、これまでのわが国の教科書研究をも引き継ぐことにより、現実的な方向性をも与えてくれている。社会学的分析の意味を、経済的・政治的規定性からだけでは説明されないある現象の社会的規定性を説明するものとするならば、教科書の実証的研究としての本書の意義がまずここに見出されよう。

なお、5章や12章では、教育の記述内容が理想的人物像の形成や数学成績に影響しているという仮定の下で、それを実証しようとしている。この仮定それ自体はきわめて有効と思われるが、ただその対応関係が見られたというだけで因果関係があると言うのは無理がありはしないか。因果関係があると想定したとき、それがどの程度であるのかという視点からのアプローチが妥当ではないだろうか。

VIでは、分析は教科書問題に対する編者・執筆者の社会的な原意識に戻っていくように思われる。ここではカリキュラムを規定する要因として、政治的統合や近代化の要因が考えられること(19章)、わが国の教科書制度がその調整パターンに照らしても、限定的・集権的であること(20章)が示される。また、最終章においては、いわゆる教育要求というものが多様であることを調査結果を用いて示した上で、その教育要求を一元化せずに、多様で自由な学習意欲がそのまま表現される「ゆるい統制」を行うという教育像が与えられる。

教育内容をめぐる判断を教育権のレベルに限定して云々するのではなく、市民の要求に支えられたものとして構想し直そうというこの主張は、教育に「学ぶ」主体を回復するという今日的な教育的課題を鮮明に浮かび上がらせていると思われる。ただし、この主張は、実証的なデータに即して語らせるという本書のそれまでの姿勢とはやや異なり一種のイデオロギー批判の形をとっているがゆえに、教育社会学者としての編者の「自己意識」が語られていると見ることもできる。